

学校で「がん教育」が始まっています ～がんを理解し、がんと共に生きる社会をつくる～

市医師会と市民病院の医師が、市内小中学校で「がん教育」を行なっています

「がん教育」とは

全国の学校で「がん教育」が行われるようになった事をご存知ですか？

文部科学省が学習指導要領に「がん教育」を明記し、令和2年度から4年度にかけて段階的に全国すべての小学校、中学校、高等学校で「がん教育」の授業が行われることになりました。津島市では、平成30年から一部の学校でモデル授業を開始し、令和3年度は市内の全小中学校で授業が行われました。

なぜ「がん教育」が必要か

「がん」は死因のトップであり、一生のうちに2人に1人ががんになると言われるほど、当たり前の病気になっています。でも、私たちがイメージする「がん」は、得体の知れない恐ろしい病気だったり、科学的な根拠に乏しい話だったりするかも知れません。しかし今では、生活習慣を改めることで発症リスクを抑えられることが分かってきました。医学の進歩により、がんの60%が治る病気になり、さらに検診で早期に発見・治療すれば90%が治る病気になってきました。ステージⅣ(治ることが難しい病状)でも5年生存率は20%以上になってきています。「不治の病」から「共に生きていく病気」に変わってきているのです。

だからこそ、共に生きて行く相手「がん」について知ることはとても大切です。しかし、私たち大人でもどれだけの事を理解しているでしょうか。

「がん教育」必修化



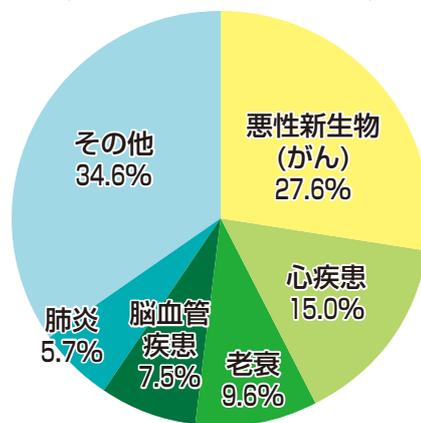
小学校	中学校	高等学校
令和2年度	令和3年度	令和4年度

目的

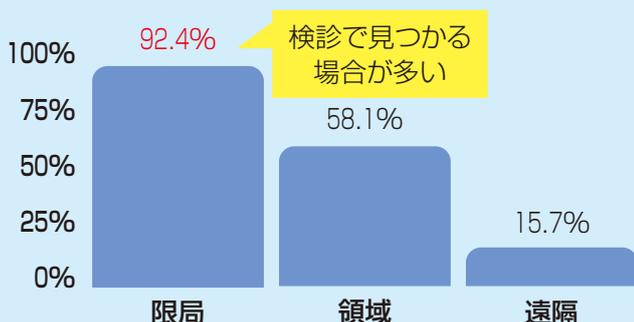
がんについての正しい理解と、がん患者や家族などのがんと向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康と命の大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る

日本人の死因順位別構成割合

(出典:2020年厚生労働省統計)



臨床進行度別5年相対生存率(出典:国立研究開発法人国立がん研究センター)



「5年相対生存率」とは
がんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合
(がんが治った、あるいは治療中の人)

※限局:がんが発生した臓器だけにとどまっている段階
領域:がんが周りの臓器やリンパ節に広がっている段階
遠隔:がんが遠く離れた臓器まで広がっている段階

大人も正しくがんを知っているでしょうか

がんと診断されて40%近くの人が仕事を辞めたり、解雇され、さらにそのうちの半数近くの人が、がんと診断された時にすぐに仕事を辞めてしまうという報告があります。これも、がんに対する正しい理解がないからではないでしょうか。がんが長く付き合う病気へと変わった今は、がんの治療にかかる費用や、治療が終わった後の生活のことも考えなければなりません。また、仕事を続けるためには、職場の人たちの理解も必要です。自分ががんになった時に、職場の人ががんになった時に、理解して助け合うことが必要ですが、残念なことに現状ではがん患者に対する理解も社会の仕組みも全く足りていません。これは、がんという病気についての正しい知識を得たり、考えたり、話し合ったりする機会が今までになかったからではないでしょうか。

だからこそ、小さいころからの「がん教育」

だからこそ、小さいころから「がん教育」を通し、がんに対して正しい理解ができれば、子どものころから生活習慣に気をつけたり、大人になった時に検診を受けるなど、自分の体を大切にしようと思うでしょう。また、身近な人や大切な人ががんになった時の事を考える機会にもなります。家族、友だち、知人、あるいは自分が…、「がん」と関わりのない人はほとんどいないのではないのでしょうか。そうした身近な人ががんになった時に、心身ともに強いダメージを受けるのは子どもたちではないのでしょうか。生活習慣をよくしたら、検診で早期発見して早期治療できることだけが、人生の正解ではありません。がんになったから、その人の人生が間違いであったわけでも、失敗であったわけでもありません。がんになっても希望を持って自分らしく生きるという気持ち、それを周りの人が理解して寄り添うことの大切さ、その時に自分が何をすれば良いのか、何が出来るのかを、「がん教育」という仮想の体験から学んでほしいのです。それは、優しさや思いやり、そして命の大切さを学ぶことにもつながります。



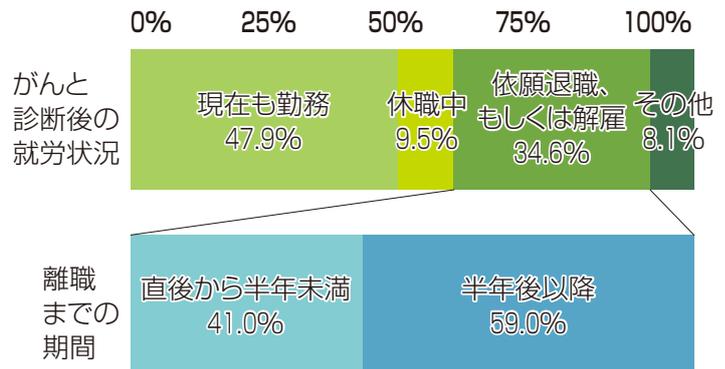
おわりに「願い...未来のために」

子どもたちが自信を持って生きていけるように、どんなに変化して予測困難なことが未来に起こった時にも、1人ひとりが考え、判断し、行動することで、幸せな未来を共ににつくっていけるように、いま学んでいるのだと思います。そんな未来であることを切に願います。

がんと診断後の就労状況の変化

(出典:2013年がんと向き合った4,054人の声)

「がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査 報告書」



市内中学校で「がん教育」の話をする
市内病院緩和ケア内科 高木健司^{たかき けんじ}医師

「がん教育」の問題点

「がん教育」で一番問題にされている点は、子どもたちへの配慮です。子ども自身ががん経験者であったり、ご両親や祖父母などががんの治療中であったり、最近身近な方をがんで亡くしたりしている子どもや保護者がそこにいる可能性は高いです(と言うより、いて当たり前です)。学校の先生方も前もって情報を確認したり、私たち講師も話す時に十分な配慮は行っています(いるつもりです)。しかし、何度も書きますが、がんがいつどこで出会ってもおかしくない当たりの病気であるならば、がんを無闇に怖がったり、がんに対する誤解や偏見をなくすためにも、子どもたちへの「がん教育」は大切だと思います。

子どもから大人へ

子どもたちは素直であり、私たちが思っているより大人です。人の話には耳を傾けます。授業後の感想でもがんに対する不安な気持ちが変わったと言ってくれます。そして、きっとそこから、さらに自分で考え、判断し、行動し、その先の人生につなげていく力があると思います。「がん教育」を受けて帰宅された時には、何を学び、何を思ったかをご家庭でも話し合ってください。それを聞くことが、ご家族の方の意識の変化にもつながることになると思います。